

## 飼育レポート①

# 「花子さんの怪我」

飼育展示担当  
西 方 理



10月9日朝、アフリカゾウの花子(メス、推定17歳)の鼻先が10cm程無くなっているのを発見した。はっきりとした原因はわからなかったが、夜間、自分でチェーンに鼻を絡めて抜けなくなり、無理やり引き抜いたためちぎれたのではないかと思われた。

アフリカゾウは、鼻先の上下にある突起で物をつかむことができ、これにより鼻先を開閉して鼻で吸い込んだ水をこぼさずに飲むこともできる。この突起が完全になくなってしまったため、餌を食べたり水を飲んだりすることができなくなる心配があった。

私たち飼育担当者は数日間、つきっきりで様子を見守った。心配をよそに、花子の様子は普段とあまり変わらなかった。ケガをしたその日から鼻で巻くようにして餌をつかんで食べ、水をこぼしながらも飲むことができた。そのため、花子がケガをしたことを知らない来園者が異常に気づくことはなかったし、外見では

日常生活に支障がないように思われた。

しかし、私たちがもっとも心配したのは傷口が化膿することだった。傷口を消毒しようとしても花子はじっとしていてくれず、うまくいかなかった。好物のリンゴに薬を埋め込んで食べさせようとしたが、吐き出してしまう。薬の苦さが嫌なのかと思い、リンゴ1個あたりに入れる薬の量を少なくする工夫をしたところ、吐き出さずになんとか食べてくれた。薬を毎日飲ませるのは根気が要る仕事だった。幸いにも傷口が化膿することはない。

花子は今ではケガをする以前と変わらない様子で生活しているが、人間にたとえるなら手の指先を失うような大ケガであった。それでも痛がる素振りや弱みを見せなかった花子に、陸上最大の野生動物であるアフリカゾウの威厳を感じた。

## 飼育レポート②

# 「チンパンジーのJ太郎」

飼育展示担当  
堀 籠 麻 子



J太郎は人間によって育てられたチンパンジーである。彼の産みの母であるジェーンは高齢のため母乳がほとんど出なかった。

生まれた当初は衰弱して痩せ細り、体重は1kg弱しかなかったが、いまでは7kgを超えるまでに成長した。私たち飼育担当者の手を離れて、チンパンジーとしての生活を送るために、チンパンジーの群に入るという新たな段階にいま来ている。

しかし大きくなったとはいえ、本来ならばまだ母親にしがみついて甘えている時期である。そのため、継母候補として私たちが選んだのは、性格が温厚なノリコであった。

J太郎とノリコの柵越しのお見合いを繰り返し、ひとつの部屋で同居させることに成功した。最初は近づこうとしなかった2頭であるが、日を追うごとに少しずつ2頭の距離は小さくなった。つぎは雄のユミノスケと2頭を同居させることになった。

J太郎とノリコが居る部屋にユミノスケを入れたと

ころ、J太郎の姿を目にしたとたんにユミノスケは興奮状態となり、J太郎をつかんで振り回し、腕に噛みついた。私たちの命令も、ノリコの制止も構わずに、ユミノスケはJ太郎を振り回し続けた。吹矢で麻酔薬を投与してユミノスケを眠らせ、やっとのことでJ太郎から引き離れた時は、もうだめだと思った。しかし、J太郎は生きていた。右腕に大きなケガを負ったものの、命に別状はなかった。

いま、J太郎のケガは順調に回復している。しかし、心の傷は癒えていないかもしれない。

私たちもJ太郎も、あんな怖い思いは二度としたくない。しかし怖いから、J太郎がかawaiiそうだからといって、J太郎のチンパンジーとしての将来を奪っていい訳ではない。

同じ失敗は繰り返せないが、J太郎が群の中でチンパンジーらしく暮らせる日が1日でも早く来るように、慎重に同居作業を進めていきたい。